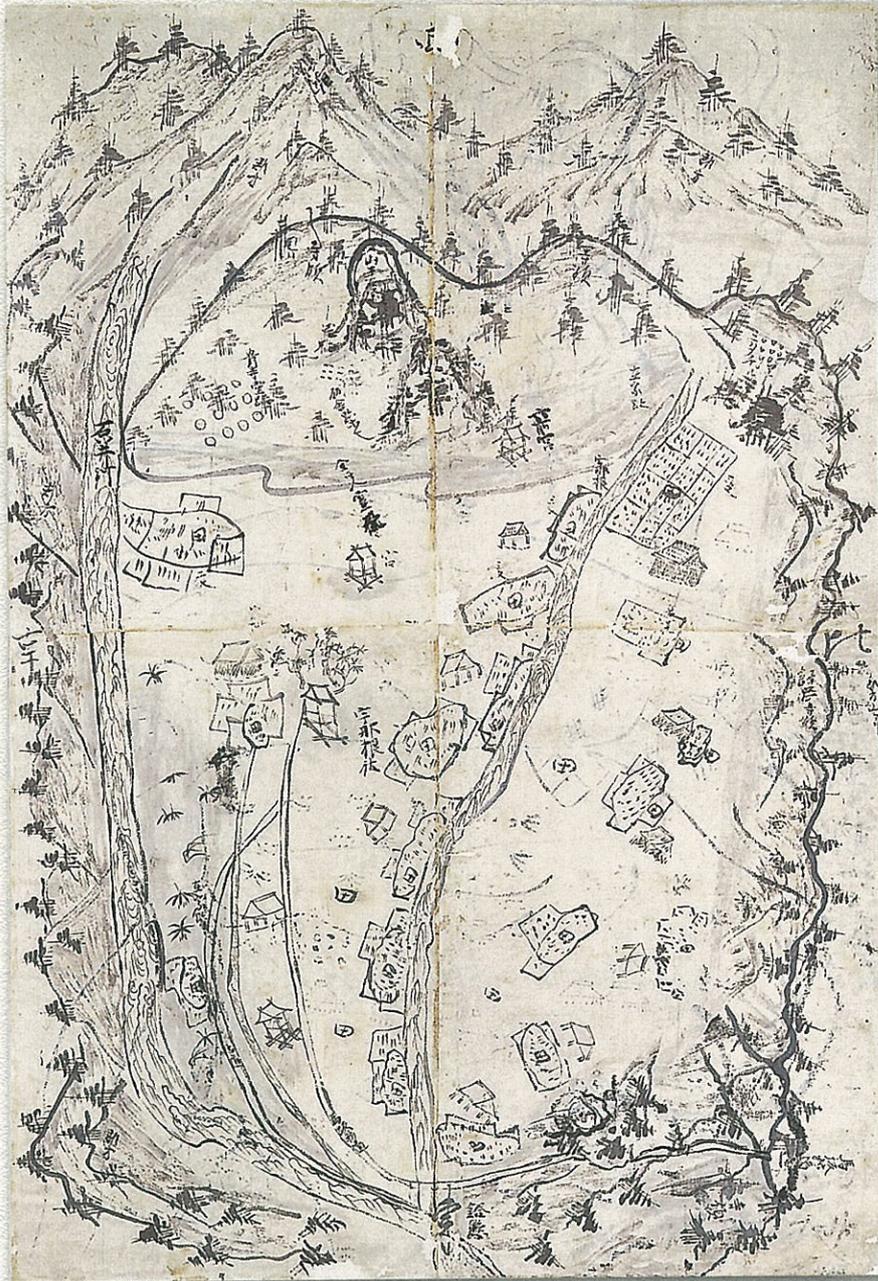


骨寺村から平泉・東北を考える

とろほく 街道会議



鎌倉時代後半に描かれた『陸奥国骨寺村絵図』在家絵図(詳細絵図)中尊寺蔵

現代に日本の原風景である中世の村の姿を残している骨寺村から学び・明日を考える

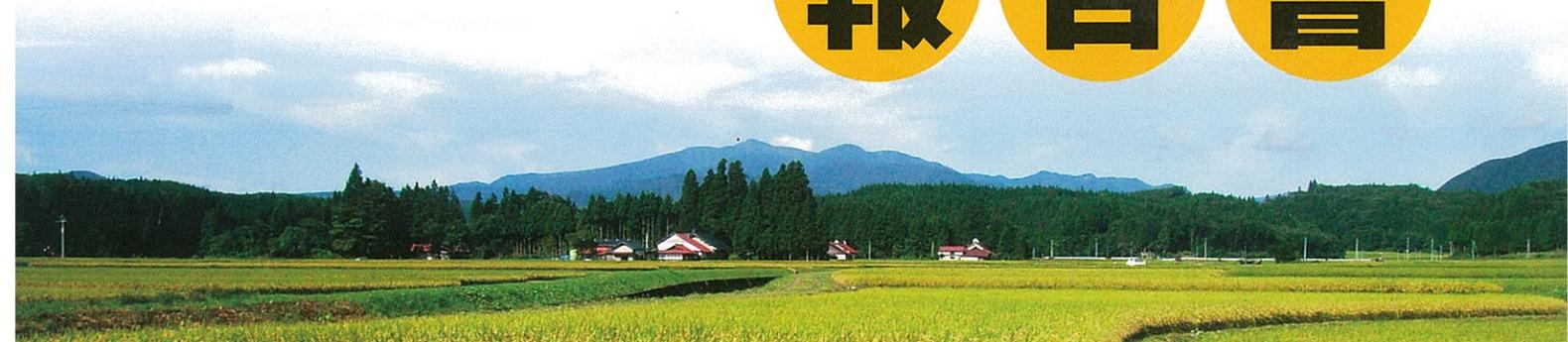
第9回交流会一関大会

月日 平成25年11月1日(金)~2日(土)

会場 いちのせき健康の森

岩手県一関市巖美町字祭時251

報告書



第9回交流会 一関大会 プログラム

11月1日(金) いちのせき健康の森

I 交流会 13:00~16:50

【オープニングセレモニー】13:00~13:50

1. オープニング 郷土芸能「本寺神楽(鶏舞)」本寺中学校生徒
2. 主催者挨拶 ■いわいの里ガイドの会会長 白澤 剛一
■とうほく街道会議会長 藤原 優太郎
3. 来賓挨拶 ■一関副市長 平山 大輔様
■国土交通省 岩手河川国道事務所長 高橋 公浩様
■岩手県南広域振興局長 遠藤 達雄様
4. 次回開催地挨拶 ■関山街道フォーラム協議会(仙台市)

【基調講演】14:00~15:30

「骨寺村馬坂新道の開削と奥大道 一公共性の概念をめぐる」

講師：入間田 宣夫氏(一関市博物館館長・東北大学名誉教授)

【分科会】15:40~16:50

●第1分科会

パネルディスカッション

「骨寺村の保存と活用について」

コーディネーター：広田 純一氏(岩手大学教授)

パネリスト：工藤 武氏(一関市文化財調査委員)

菅原 光中師(中尊寺・大長寿院住職)

佐藤 勲氏(本寺地区地域づくり推進協議会会長)

白澤 剛一

アドバイザー：入間田 宣夫氏

●第2分科会

車座座談会

「芭蕉の道奥の細道を通じた交流連携」

座長：京野 英一氏(おくのほそ道松島海道会長：仙台市)

語り手：伊藤 良孝氏(にかほ市観光案内人協会会長：にかほ市)

山口 ステファン氏(㈱トラベル東北社長：最上町)

芦川 宏(いわいの里ガイドの会副会長：一関市)

II 街道パネル展 12:00~17:00

骨寺村に関するパネルや東北各地の街道関係交流連携団体の活動紹介パネルなどを展示。

III 交流会(街道談義) 17:30~19:30

郷土料理や地酒による交流会

11月2日(土)

探訪会 9:00~16:00(15:00)

(凡例) →徒歩 ⇒バス

【A:骨寺村をめぐる】

いわいの里ガイドの会の案内により史跡指定地区などを巡った。

■集合：JR一ノ関駅東口8:45(9:00出発)又は骨寺村荘園交流館(若神子亭)9:25

■コース：若神子亭展示棟見学⇒慈恵塚⇒慈恵大師拝殿⇒若神子社⇒要害橋⇒若神子亭(昼食)⇒山王窟⇒梅木田遺跡⇒駒形根神社⇒本寺川沿⇒要害橋⇒若神子亭⇒一関市博物館⇒一ノ関駅西口(16時解散) ●全延長約50km(うち徒歩4km)

【B:芭蕉の道を通る】

いわいの里ガイドの会の案内により芭蕉の歩いた平泉、一関市街地及び上街道(迫街道)を通った。

■集合：JR一ノ関駅東口8:45(9:00出発)

■コース：中尊寺にバス移動(経蔵⇒大長寿院)⇒高館⇒二夜庵跡(車窓)⇒上街道(迫街道)追分⇒新山一里塚跡(車窓)⇒蔵主沢⇒荻又一里塚入口⇒川台中央公民館(昼食)⇒荻又一里塚入口⇒荻又一里塚⇒県境⇒一関カントリークラブ⇒よしめき坂⇒JR一ノ関駅東口(15時解散) ●全延長約50km(うち徒歩9km)



いわいの里ガイドの会

会長 白澤 剛 一

本日は、一関の中心街から離れた紅葉真っ盛りのこの祭時^{まつるべ}にお集まり頂きまして有難うございました。今回の交流会のメインテーマは、「骨寺村荘園遺跡」を東北に広く発信することですが、併せて「芭蕉の奥の細道」について、関係各地団体とのネットワークづくりも、大きなテーマであると理解しております。

私どもは予めから街道、特に東北に未だ色濃く残っている「芭蕉の奥の細道」を地域資源として、地域おこしが出来ればと考えてまいりました。

「奥の細道」の観光として、松島と平泉や、立石寺などの名所のそれぞれを単独で巡るのが一般的です。しかし、本当の意味で「奥の細道」を体感するには、やはり要所要所を徒歩で巡るコースの設定が不可欠であり、そのため関係の各地団体とのネットワークづくりが重要であると考えております。

このため、5年前から松島・象潟・鳴子・尾花沢・立石寺・最上川・羽黒山等の地域に出向き、現地研修と併せて関係団体との交流を実施してきたところです。また、平成22年度には一関市役所から調査を委託され、仙台市から山形県最上町封人の家まで芭蕉が辿った道の約200kmを調査し報告するなど、その下地作りも進めてまいりました。

このような意味からも、今回のこの大会を一関で開催する機会を得たことは、骨寺村荘園遺跡の歴史的役割と現状の姿および世界遺産の追加登録に向けた取り組みを東北各地へ発信すると同時に、奥の細道を巡る東北地域のネットワークづくりを、更に一步前進させることが出来る機会であると確信した次第であります。

本日は、この後、入間田先生の骨寺村荘園遺跡に関する基調講演、骨寺村荘園遺跡と奥の細道に関する分科会等がありますが、それぞれの方々の見識と経験等に基づく非常に興味深い話が聞けると思いますし、その後の街道談義では、それぞれの方々との交流の場でもありますので、是非最後まで参加して頂ければと思います。

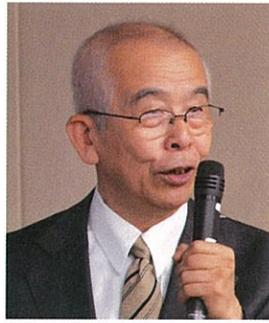
最後になりましたが、関係の皆様方および会員の多大なご助力とご支援により、沢山の方々参加を得て開催することが出来ることを、実行委員長としてお礼申し上げます。

「骨寺村荘園遺跡」(一関市巖美町本寺地域に位置する)

中尊寺に現存する鎌倉時代後期の「陸奥国骨寺絵図」(国の重要文化財)にほぼ近い形で、現在も中世社会の荘園の面影をとどめている大変に貴重な遺跡である。骨寺村荘園は、中尊寺の僧「自在房蓮光」が「紺紙金銀字交書一切経」の完成に功より、藤原清衡から経蔵別当に任ぜられた。蓮光は、経蔵の維持のため、私領であった骨寺村を寄進し、以来室町時代まで経蔵別当領として伝領された。

平成17年に、堂社や岩屋など9つの区域が国の史跡に指定された。また、史跡指定区域を包括する伝統的な村落景観が一関本寺の農村景観として、平成18年に重要文化的景観に選定されている。現在、保存と活用の様々な取り組みが行われるとともに、世界遺産「平泉」の関連資産として拡張登録を目指している。

基調講演



骨寺村馬坂新道の開削と奥大道 —公共性の概念をめぐって—

講師

入間田 宣夫氏

(一関市博物館館長・東北大学名誉教授)

平泉の世界遺産登録を振り返りながら、「中尊寺に残される二枚の絵図」から見える骨寺村について、絵図と現状を対比させ、その意義と拡張世界遺産の可能性。また仏教伝来後の「馬坂新道」の開削は、その目的や公共性をどの様にアピールしたのかについて説明頂きました。

仏教と自然信仰の融合

平泉の世界文化遺産登録にあたっては、インド・中国伝来の仏教が、日本固有の風土と、ないしは日本固有の自然信仰(神道)と「融合」するなかで、建築・庭園・考古学的遺跡群の織り成す、世界に類例のない景観がかたちづけられた。すなわち、「アンサンブル」として独自の景観がかたちづけられた。そのことが高く評価されている。

だが、そのような外来の仏教と在来の自然信仰との「融合」による「アンサンブル」は、都市平泉のみにはあらず。その郊外に位置づけられる中尊寺領骨寺村においても、確実にかたちづけられていた。

具体的には、中尊寺に残される二枚の絵図によって、山間の小村に仏教が伝えられて、在来の自然神に対する信仰と「融合」するなかで、日本農村の原風景ともいべき独自の景観がかたちづけられたことが、鮮明に描き出されていた。しかも、そのうえに、その原風景が、今日にまで残されている。

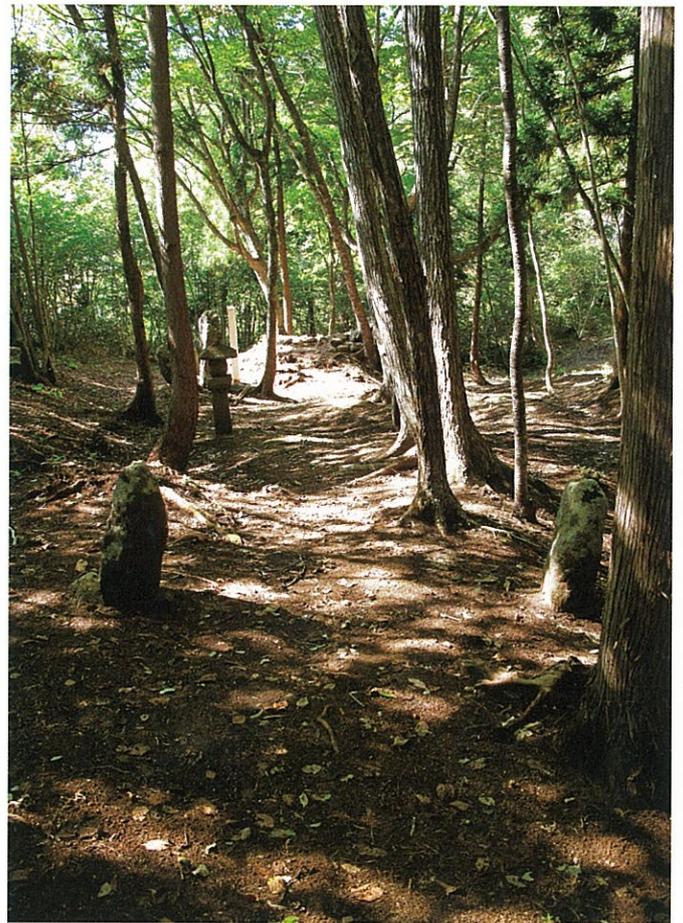
日本広しといえども、アジア広しといえども、これほど鮮明に、仏教伝来による農村景観の「アンサンブル」形成を物語ってくれる場所はない。すなわち、骨寺村にも、世界文化遺産としての十二分の価値あり。といわざるをえない。

絵図に見る骨寺村の景観

そこで、二枚の絵図に接近し、目を凝らしてみるならば、外来の仏教に関連する施設としては、中尊寺僧・自在房蓮光所縁の仏堂(「骨寺」)、比叡山延暦寺鎮守山王神を勧請した「山王窟」、同じく延暦寺に連なる「白山社」、さらには金峰山(「ミタケ」「蔵王堂」)、「不動窟」などが、描き出されていた。

それに対して、在来の神々としては、「駒形根」(栗駒山)の神と、その里宮たるべき「六所宮」(駒形根神社)、農業用水の神たるべき「宇奈根社」ほかの神々が祭られていた。

そのうえに、中尊寺僧・自在房蓮光のリーダーシップに



旧馬坂新道から慈恵塚を望む

よる村の再開発にあたっては、村を貫流する小河川(「桧山川」、いまは本寺川)を塞ぎ上げて、水田を潤すという新たな技術が導入されることになった。あわせて、新たな住人が招き寄せられてくることになった。これまでは、湧水や沢水に頼った小規模な水田が点在して、五〜六戸の在家がくらしているだけであった。それが、再開発によって戸数が倍増したというのだから、大違いである。

公道としての馬坂新道

そして、「馬坂新道」の開削である。いまでいえば、スーパー農道の開削である。それによって、中尊寺方面との往来には、馬を利用することが可能になった。これまでは、磐井川の絶壁沿いにかたちづけられた「古道」に、すなわち人



間だけがやっとのことで通行できる危険極まりない狭小の道に頼るしかなかったのに比べれば、大違いである。

さらにいえば、「馬坂新道」が峠を越えて、骨寺村の入り口に差し掛かる辺りには、「経塚」が築かれていたらしい。そのことが、最近の調査によって明らかにされている。

「経塚」は、遠い未来における弥勒菩薩の来臨（「下生」）に備えて、法華経ほかの経典を埋納するタイムカプセルのような施設であった。

その「経塚」が、「馬坂新道」の要衝近くに築かれていることによって、この道は単なる私道にはあらず。仏の加護に預かる「公共性」の高い交通路として、ありがたく受け止められることになったのではあるまいか。そのような「公共性」をアピールする施策を打ち出すことによって、蓮光らによる再開発の事業は、好意的に受け止められることになったのではあるまいか。



本寺川と駒形根神社

仏の道としての新たな公共性の創出

そういえば、平泉初代清衡が、国づくりを開始するにあたって、最初に手掛けた施策は、「奥大道」の整備であった。白河関（福島県白河市）から外が浜（青森市）に至る、いまならば、東北縦断道にあたる幹線道路のことである。その長距離の幹線道路を行くこと、一町（109メートル）ごとに、金色の阿弥陀仏を図絵した笠卒塔婆を並べ立てた。というのだから、尋常ではない。

その金色阿弥陀仏の笠卒塔婆を並べ立てることによって、その道は、清衡の私用にはあらず。仏の道として、公用に供すべきものとして、万人によって受け止められることが、期待されたのではあるまいか。

これまでは、天皇の権威によって、幹線道路の「公共性」が担保されるというシステムが採用されていた。だが、清衡には、そのような権威の持ちあわせはなかった。それによって、私的な通行税の取り立て、道路敷の耕地化、または山賊・追剥行為の類によって、交通の円滑を侵害されるようなことにもなりかねなかった。そのような不安に対処するためにこそ、仏の道たるべきことを人心に訴えることによって、新たな「公共性」を創出するべく、清衡は奮闘しなければならなかったのではあるまいか。

その当時、クメール王朝の首都、アンコールワットから地方に向かう幹線道路の要衝には、多くの仏・神像が並べ立てられていて、「王道」としての「公共性」をアピールしていた。清衡のばあいにも、事情は同じく。ということだったのではあるまいか。

さらにいえば、「公共性」あり。とする受け止めが、人びとによってなされなければ、どんなに立派な工法を採用したところで、道路の永続性を期することはできない。という根本的な事情においては、時代によって変わるところがない。変わるとするならば、「公共性」をアピールする手法だけである。とするようなことも、できるであろうか。



要害橋から若神子社と逆柴山を望む

第1分科会

パネルディスカッション

『骨寺村の保存と活用について』

骨寺村の調査研究、保存及び活用に関わる方々に、骨寺への関わりや魅力、及び持続可能な活用に向けて、今後の課題などについてお話しして頂きました。



本寺との関わり

○**広田純一**（コーディネーター） 自己紹介と具体的に本寺（骨寺）にどの様に関わってきたか、皆さんをお願いします。

○**工藤武**（パネリスト） 本寺には、平成7年頃から関わって、平成11年に発掘調査を行いました。実際には、今実施している本格的な調査と違い、当時は本当に遺跡なのかどうかを確認する調査でした。一方、地元では効率の良い大きな田んぼにしたいという希望もありましたが、史跡指定すると、現状が固定されるので、大変使い勝手が悪くなるため、指定場所を限定するための遺跡の確認に取り組んだという状況です。

具体的には、梅木田遺跡の大きな柱の建物跡や遠西遺跡の厚焼きの陶器破片などが出るなど、概ねその時代を裏付ける物が出ました。それから、絵図に沿って今も家があるため、その限られた土地の試掘調査で遺構があることが分かり、史跡指定地を確定し、平成17年に指定出来ました。

しかし、史跡指定だけで、この地域を守るには手薄でしたが、タイミング良く景観法が制定され、動的な保存が可能になり、平成18年に「重要文化的景観」に選定されました。

○**広田** 補足します。本寺では、長い間、圃場整備の意向があり、文化的な遺跡と圃場整備をどう整合させるかという長いせめぎ合いがありました。平成12年、地元と研究者が一堂に会した委員会が出来て、その遺跡調査の中心が工藤さんです。

また、本寺の価値で一番重要なのは田んぼや曲がった水路ですが、それを史跡にすると現状を変更出来なくなるので、宗教的施設などは史跡にして、田んぼや水路は「重要文化的景観」で守るということで進めて来たということです。

○**菅原光中**（パネリスト） 私は昭和16年に中尊寺で生まれました。仏教大学で学び比叡山での修行を終えて、昭和40年、中尊寺に帰山して以来、現在に至っております。入間田先生の基調講演で、山王窟に経蔵別当である自在房蓮光の骨が葬ってあるとの話がありましたので、蓮光師の末裔として、お墓参りに行かなければと思っています。

本寺の皆様方とは、蓮光師以来、長い間お世話になって来ました。また、中尊寺も同様です。現在、田植えや稲刈りの行事への参加、あるいは米の奉納、そして立木（たてぎ）も運んで来て頂いています。米は正月のご祈祷時などに、立木は正月と秋の護摩焚きや寺の燃料として有効に大事に使わせて頂いています。

○**佐藤勲**（パネリスト） 私は、昭和19年に生まれ、ここに70年暮らしています。ここは中山間地で、後継者問題どころではなく、後期高齢者の社会が目前に迫る中で、どうなるのかという心配がありました。その中で、世界遺産の話が出たものですから、まさに青天の霹靂です。我々は生活をどの様にしていって良いのかということで、泣くような思いでした。

これまで800年も待つて、何で私たちの代に出て来たのかと少し恨みもしましたが、私はこういう機会を得たというのは、神様、仏様のご縁かなという思いもあります。この地域をどの様にするかで、地

域で喧々囂々の議論もしましたが、ここまでの経過はその歴史の中に大きく残るし、地域のためになると思っています。

お陰様で、支援者、指導者及び国・県・市とのつながりが財産だと思っており、そういう人達に囲まれた中で、ここまで来たというのは非常に運命を感じています。

○**白澤剛一**（パネリスト） ガイドの会として、骨寺村荘園遺跡の話題を聞いたのは平成17年頃で、その後、世界遺産登録の情報もあり、平成19年度に座学と現地研修を10数回行い、ガイドの体制を整えて来ました。平成20年4月下旬から散策ガイドを始めたのですが、6月14日の岩手・宮城内陸地震の発生で一時的に中断し、数か月後に再開したのですが国道の不通で迂回となるなど、厳しい幕開けの年になりました。

統計的には、平成20年度来訪者は、年間約5,700人でしたが、その後風評被害等で10%ずつ減少、更に平成23年の東日本大震災で、平成24年度は対20年度比7割減となりました。しかし、平成25年4月6日骨寺荘園村交流館の展示棟開館に伴い、来館者が4～6月で一日平均80人、多い日には200人を超す盛況ぶりでした。開館から9月末の半年間で月平均約2,000人、平成24年度の年間来訪者数と同じとなり、9月4日に来館者が1万人を達成しました。

本寺の魅力について

○**広田** 本寺の魅力をそれぞれの立場でお話します。

○**工藤** 一言で言えば、ノスタルジーや知的好奇心ですが、最も大きな魅力は、国の重要文化財の絵図と照合して、現地を確認出来ることだと思います。

表面的な土地利用は時代とともに変わっているが、絵図に描かれたその土地を基本的にどう使うのかということは、まるっきり変わっていない。河川や微高地、耕作地や山、それぞれの特徴をそのまま継承しながらうまく利用されている。そして変わらない風景ですが、やはり絵図や中尊寺関連史料があることが他と違う。これが大きな要素だと思います。

あとは、発掘調査等で新しい要素が付け加えられていく、そのヒントとなる元禄時代の絵図や安永風土記を参考にしながら解明していくという魅力があります。

○**広田** 発掘調査等でこれまで分からなかったことなどが出てきて、ワクワクする場面は結構あったのでしょうか。

○**工藤** 中世の遺跡はなかなか遺物が出ないものです。この場合もすぐ分からなくて、あれは何だったのだろうかとのものと比較し、可能性として12世紀代だろうという形になっていくのです。

それと範囲確認調査ですから、全部発掘してしまうことはしないのです。この辺の情報で取りあえず調査をストップして、あとは今後の技術進展や考え方に期待して、後世に託すという考え方です。

○**白澤** 魅力は二つで、一つは歴史的な魅力です。私が骨寺村荘園遺跡を案内する時、まず三つに絞って話します。一つは誰の荘園か、次は骨寺の名前の由来、そして文化的景観と現在の農村の



広田 純一氏



入間田 宣夫氏



工藤 武氏



菅原 光中師



佐藤 勲氏



白澤 剛一

あり方です。その後、相手の反応や質問によって、平泉の藤原文化や前九年・後三年の合戦まで掘り下げます。余り興味がない人には、四季の景色、植動物、また食材などに話題を切り替えます。

二つ目は自然景観で、要害橋から東側を眺めた若神子社等や西側の田んぼとイグネの向こうに見える駒形(須川岳)の景色は、中世の農村を彷彿させるものがあります。この景観に魅せられ何回も訪れてきている人が何人もいます。

○菅原 平泉の場合も40～50年前までは、金色堂など文化財は全国の方々がすごいというけれども、研究者の調査研究、特に発掘等々でこれはという遺構、出土品が出て、初めて町民も段々意識が出て来た。しかし、何で文化財に金を掛けるのか、観光の金儲けのためかという意識だった。ですから、世界遺産登録に向けての運動も、他市町村や全国からの声が多く出始めて、まとまったという次第です。

本寺の魅力は、神と仏との関係が大事だと思います。骨の付いた寺名は、中国にもどこでもない。それが魅力や次世代に繋がるとおもしろい。「山王窟に蓮光師のお墓があった」ということになれば、これは一気に魅力になるのではないかと。

もう一つは、慈恵塚です。塚には、天皇陵や墳墓から、小さい山の至るところにもありますが、あそこにお経が納められているとなると、仏教的意義がかなり転換して来ます。髑髏が村の娘に法華経を説いて聞かせたという骨寺村の由来伝説は、山王窟と同等に、この地区が宗教、神仏を越えたような特殊で希なる聖的な場所だというふうに思います。

世界遺産は先ず置いて、目に見えない、こういう霊的なものを一つ一つ大事にしていけば魅力になると考えます。ここで育ていく生徒たちにも感じて頂ければと思います。

○佐藤 本寺地区地域づくり推進協議会は平成16年3月に立ち上げた団体です。活動のきっかけは、景観法が平成16年6月に制定されますが、本寺のために出来る法律じゃないかと市役所の人に懇々と言われたのです。そう言われても文化遺産、重要文化的景観ってなんですかという意識でした。

こんなところに、平成15年12月30日に地域の人が招集され、推進協議会を立ち上げ地域づくりをしないかという内容で、世界遺産登録の可能性があるとされた。何がなんだか益々分からなくなった。

私たちが考えていたのは、我々の代から次の世代にバトンタッチする時に、この地域はこのままで良いのかという議論でした。若い人はほとんど外に働きに出ます。その人たちが本寺に帰って来るためにはどうしたら良いのかと悩みました。先ず、生産基盤である水田を直すことが一番大事ではないかと、平成7年に基盤整備推進協議会を立ち上げてから9年掛かってたどり着いた訳です。その結果、景観を保全しながらの基盤整備は平成20年から工事を実施して、25年完了しました。

これまで平成17年の史跡指定、平成18年が重要文化的景観の選定、そして平成20年の世界遺産登録(の実現)へ向けた取り組

みと私たちは休みなしでした。平成16年には会議を163回行いましたが、その前後の打合せもあり、毎日会議や集会でした。仲間たちと良くここまで来たよなといつも話しています。

魅力というのは、一般の皆さんから協力を頂き、本寺の魅力はここだよと教えられて勉強している状況です。景観を維持していくことが大変難しいと思っていますし、一番の課題だと思い、そのために今一生懸命努力しています。

入間田先生からは、「本寺だけでも、世界遺産登録の価値がある」と言われますが、そのためにも、私たちが先ず保全活動を一生懸命やっていかないと皆さんにも通じないことです。そして、この本寺地区を次の世代に引き継ぐことが、私たちの使命だろうと思っています。

今後の保存と活用における課題について

○広田 佐藤会長には、もう言って頂いたので、残りの3人の方にこれからの課題を簡潔にまとめてお願いします。

○菅原 佐藤さんの言うとおりで、我々中尊寺でも、いろんなものを守って来るのにやっぱり使命感、継いでいかなきゃならないという理屈抜きの使命感です。これをみんなで共有していくということが大事なことだと思います。そのためには、みんなで本寺のことに関心を持ちながら、できるだけ協力を頂く、それに尽きるかなと思っています。

○白澤 現在、展示棟を含むこの地のガイドは、私どもガイドの会7～8名が通いで従事していますが、将来的には、地元の方々が思いをもって案内に当たる方がより臨場感があって良いと感じています。

○工藤 今、市博物館で総合的な調査を進めていますが、これを継続充実させて行くということで、地域の価値を高めていく努力は、今後とも続けて行くことが必要です。

次に、やはり地元の方々がここまで苦勞されて理解し、取り組んできた内容を次の世代に継承させていくことが、大変重要なことだと感じています。

○広田 最後に入間田先生から、今後の本寺に対するメッセージを頂ければと思います。

○入間田(アドバイザー) 次世代、あるいは未来への様に繋げて行くかということが課題だと思います。これは、全国の中山間地域共通の問題ですけれども、特に本寺の場合には、そういう課題が非常に鮮明に現れていると思います。それには地元の考え方が一番中心ですけれども、地域と行政とそれから我々学会との連携を、これまで以上に密にしていく必要があると実感しました。

○広田 まとめると次世代へどう繋げていくかが一番大きな課題だという結論です。それに付け加えれば、本寺の周辺にいろんな地域があり、そういう地域と連携するのもこれから大きな課題になるかなと個人的に思っています。

第2分科会

車座座談会

『芭蕉の道、奥の細道を通じた交流連携』

芭蕉の奥の細道をテーマに活動する方々に参加して頂き、活動内容の紹介や今後の交流連携を含めた方策などについて話し合っていました。



活動内容の紹介

○京野英一(座長) 先ずは、皆さんに自己紹介を兼ねて活動報告をお願いします。

○伊藤良孝(語り手) にかほ市で観光案内人をやっております。生まれは隣の山形県遊佐町ですが、旧象潟町に住んでもう40年ぐらいになります。にかほ市と言っても分からない人が多いですが、象潟というと松尾芭蕉が来た所ということですぐ分かって貰えます。

昔、象潟は海だった。それが地震で陸になり島々が点々と残っている所です。それから山形との県境には三崎山というのがあり、ここには芭蕉の歩いた古道がまだ残っています。

当初は、歴史の案内、松尾芭蕉の案内でガイド協会が立ち上がった訳ですが、残念ながらそのお客さんがグッと減っています。増えてきたのが鳥海山麓の獅子ヶ鼻湿原という自然の散策です。そのため、松尾芭蕉に関しては勉強も途中で止め、今度は山の方へ舵を切っていた現状です。

今回、この大会があることを聞き、皆さんからいろいろと勉強したいなと思い参りました。

○芦川宏(語り手) 私は、東京生まれで、一関市に来てもう42年目になります。私どもいわいの里ガイドの会は、観光ガイドの他に、一関駅構内での観光客や街の中にある江戸時代中頃の旧沼田家武家住宅の案内と、骨寺村荘園交流館の展示棟での常駐の案内が主な活動になっています。観光ガイドの他に「語り部」も行っています。

芭蕉の奥の細道のガイドに関しては、特にコースは設定していませんが、芭蕉が最北の宿として一関に二泊したという二夜庵跡があり、そこから平泉に行き、迫街道(上街道)で岩出山方面に向かったという所も希望があれば案内しています。

他に、芭蕉が歩いた道、仙台から石巻、石巻から一関、そして封人の家までの約200kmを3班に分かれ、9か月かけて、歩けるところは実際に歩いて調査して報告書を作成しています。

我々も今回の街道会議を契機に他県の皆様とも交流を図り、芭蕉の道を繋いだ何かが出来ればと思って参加しています。

○山口(語り手) 鳴子温泉のちょっと先にある最上町から来ました。アメリカ23年、ヨーロッパ2年、日本に来て28年と一番長くなりました。東京で最上町出身の女性と出会って、もう最上町には、20年暮らしています。最初の3年間は建設会社の後継ぎで、その後10年間社長を務めました。

小泉改革で仕事が減り7年前にやめて、大崎市古川に本社のあった旅行業者「トラベル東北」を買収しました。その店が3.11東日本大震災で被災して、3月末で古川の店を閉めて最上町に本社を持って来ました。今でも宮城の方は3人に勤めていて、いずれまた宮城に店を開きます。

私は、アメリカの大学で日本研究した時に奥の細道の英訳を日本文学のクラスで読ませて頂きました。結婚して来た町を奥の

細道が通っているの、すごく興奮しました。歩きたいと言ったら、じゃ鳴子に行って山形の県境まで歩けと。それが16kmとか一番まとまっている空間らしい。それが本当の細道、芭蕉が歩いた道だと言うけれども、あちこちにもっと古い道あるのですが、広くしたり、もともと足を濡らしながら渡った沢はコンクリートの橋をかけたりで観光化されている。何でいじる必要があるのかって、私はものすごく悔しい思いです。

○京野 私は生まれも育ちも松島で、もうすぐ65歳です。私が奥の細道に興味を持ち始めたのは、商店街活性化検討がきっかけです。奥の細道が私の家の前を通って、ほとんど舗装の道になっていますが、芭蕉が歩いた土の道が2km程そのまま残っています。一人でそこを歩いて見たら、カエルやヘビは出るが、昔の人はここを歩いたのだと思うと感動しました。それで、奥の細道を歩こうということで海道の会を創りました。

松島は有名な観光地ですから観光ガイド会社が既に存在していますが、案内する場所は五大堂と瑞巖寺のみです。やっとな7、8年前に観光協会にボランティアガイドの組織が出来たので、入会しています。

それから、2000年から「芭蕉の道を辿り、往事を偲ぶ集い」を開催し、歩いて案内し、夕方、貸切船に乗り、松島の月を眺め海道談義をするということをして14年続けています。

他に、月例の勉強会開催や、仙台的北目町から登米までの一里塚と宿駅の距離や位置を3年掛かって調べました。それらの成果を仙台郷土研究会機関誌にも寄稿しています。特に今年、曾良が書いた仙台北城下の歌枕絵図を元に、仙台北城下の芭蕉道を3年かけて地図に書きました。

連携した取り組みの可能性について

○京野 点として存在する"芭蕉や奥の細道"資源を線で結び連携することにより、更に魅力を高めることも必要であると思いますが、皆さんの考えをお願いします。

○山口 街道の街の字は、行くという字を分けて、土、土と書く。人間が歩いて踏み固まるのが街道で、街道は歩くべきものです。連続的に歩けることが大事です。例えば迫街道は、途中、部分的にバスを下りて歩けるところがありますが、東北の観光の目玉である奥の細道の全区間を安全に歩ける土の道として整備すべきです。ここからここまでは昔のままの道で、ここからの500メートルは平成13年に作ったものと、ちょっとした看板で表示すれば良いと思います。美しい自然の中を通っている訳ですから、繋げることがすごく大事な事だと思います。

○伊藤 三崎山の古道は山形県と秋田県に跨っています。所々草木が道をふさいだり、石が崩れ、道が途切れたりしています。出羽の国どうし協力し合って、歩けるように整備しておけば、この古道の魅力が増していき、旅人を楽しませてくれるでしょう。また、他県との共同作業でより、一層の連携意識が芽生え、新しい道が発見されるかもしれません。道の繋がりが、人の繋がりになるかもしれ



京野 英一氏



伊藤 良孝氏



山口 ステファン氏



芦川 宏

せん。街道交流会の目的の一つかもしれません。

○芦川 自分たちの地域内だけに捉われず同じ目的を持った仲間との連携は大切なことだと思います。まずは、となりの地域との連携からスタートし、点から線、線から面へと広げていくのが良いと思います。そのためにも今回の交流会で東北の連携が強まることを期待します。

地域コミュニティ・ビジネスの視点について

○京野 これまでの地域活動は、ボランティア活動やボランティア活動の域を出ていない活動が多く、これらは個人に依存した活動が主であり、持続可能な活動としては不安があるのが実態です。持続可能な活動とするために地域が主体となった地域コミュニティによるビジネスとして取り組むことが必要であると思いますが、どの様に考えていますか。

○山口 観光は儲かる商売ではないが、楽しく・おもしろくて、人を喜ばせることが出来て非常にやり甲斐があります。しかし、どのような観光をやるにしても、まずは従事者の生活が条件です。補助金等で、宝物を磨いたりすることをやったりはするけれども、ほとんど持続性はないのが実態です。よく見ると、生活していくという真剣味がないからです。だから、本当に街道を連携して、大いに盛り上げたいのなら、やっぱり請負人が必要です。リタイアしたボランティアガイドさんのお手伝いと知識は、すごくありがたいけれども、やっぱりきちんとしたビジネスになって自立していかなければならないと思っています。

私は、7年前から関東等の方を東北に呼び込んで地元のコーディネートによりもてなす、いわゆる着旅(ちゃくたび)に取り組んでいました。非常に難しいけれども、実績を上げていたところに、震災が起きて一気に問い合わせが来なくなった。まず、東北を避けたい人は避ける、行くのだったら被災地へということで、日本海側の旅行業は大打撃を受けているのが実態です。

○伊藤 観光ガイドと言うと、ボランティア(無償)活動の意識が世間では強いようです。団体客を案内している最中に、お客から有料か無料の問い合わせがあります。鳥海山麓の森は山岳ガイドと違い、高いレベルのスキルが必要な訳ではありませんが、怪我もなく楽しく2~3時間を過ごしてもらうにはそれ相当の神経も使い、勉強もして案内します。また、町のPRをし、いかに地域の活性化に繋げるかを考えます。ガイドの仕事はビジネスとして、一つの地域産業と考えるべきです。

○芦川 ガイドの会単独での活動では限りがあり、他団体や他機関との連携、特に行政との繋がりも大切だと思います。幸い私どもは市との協働で、会員拡充のためのガイド養成講座を2年に一度開催していますが、外に商店の販売員のための「おもてなし観光ガイド」冊子作成の資料提供等で、地域と連携した活動の場も広がっています。

○京野 奥の細道の点と点がつながって、お客様が満足できるようなコースをつくれれば、山口さんがおっしゃるようにビジネスになる

と思います。しかし、まずは地域の宝を自分の足で探す必要があります。簡単に見つかる訳じゃない。私たちも、しつこく同じことを繰り返して、14年続けてきましたが、新たな発見が毎年少しずつ出てきます。地味な活動で、すぐビジネスになる訳じゃないのですけれども、将来、伸びられるようにしたいと思っています。

会場との質疑応答

○質問者 「偉い先生の話だけではなく、地元で隠れた良いところがある、これを探していくことが良いのではないか」との話もあったが、具体的にどうしたらいいか。

○山口 私の観光ガイドの捉え方、生かし方は、通常と違うと思う。学問的な知識より、必ず情熱を優先する。例えば、乗馬ガイドは馬を愛していないと駄目です。あるいは登山のガイドは山が大好きで、その情熱が人に伝わる。

何で情熱が必要かという、大抵の観光客は都会から来る。コンクリートのジャングルの中で暮らしていて、五感が鈍っているわけです。何を求めて観光に出るのかですが、美味しいもの、美しい景観、感動的な瞬間だったり、何か感じたい訳です。ガイドが観光客を何か、深く感じる瞬間に引っ張り込む必要がある。自分が感じないことをいくら喋ったって、馬耳東風ですけど、人が本気に喋ったことはしっかりと残るものです。

学問的な説明が私の一番嫌いなことで、居眠りしちゃう。芭蕉に関して言えば、芭蕉の細かいことは別に、俳句の精神として、今この瞬間を掴むこと、冷たいとか、風の香りがとか、そういうものを感じられるところまでお客さんに言うのが、芭蕉観光だと思います。

○伊藤 にかほ市にも、はっきり言ってこれは間違いだというようなものもあります。例えば、昔、船が着いた場所で、石に左右往還と掘られていると、ガイドブックや町史に書いてあります。しかし、実際その石を見ると左右じゃなくて左往還、また左です。その下は風化して読めないのですけれども、左・左なのです。ですから、お客さんを案内する時は、案内板の説明はあるけれども、実際は左と左ですよと、はっきりと間違いですと言って、お客さんも納得してくれます。

もう一点あります。太宰府天満宮と昭和の初めに大きな字で掘られています。太宰府天満宮とは、九州の太宰府にあるからそういう名前なのであって、あとは全国どこにもそんな名前のものはないのです。それを指摘しても行政では直さないのです。それも今、山口さん言った様に、強く気持ちをお客さんに伝えていきます。

○芦川 確かに、学問的なことよりも、多くの方は観光として楽しみたいと思って来られるわけですから、学問的なことをくどくどお話してもそっぽを向かれてしまう。相手を見極めながら情熱をもって分かり易くお話することが第一だと思います。

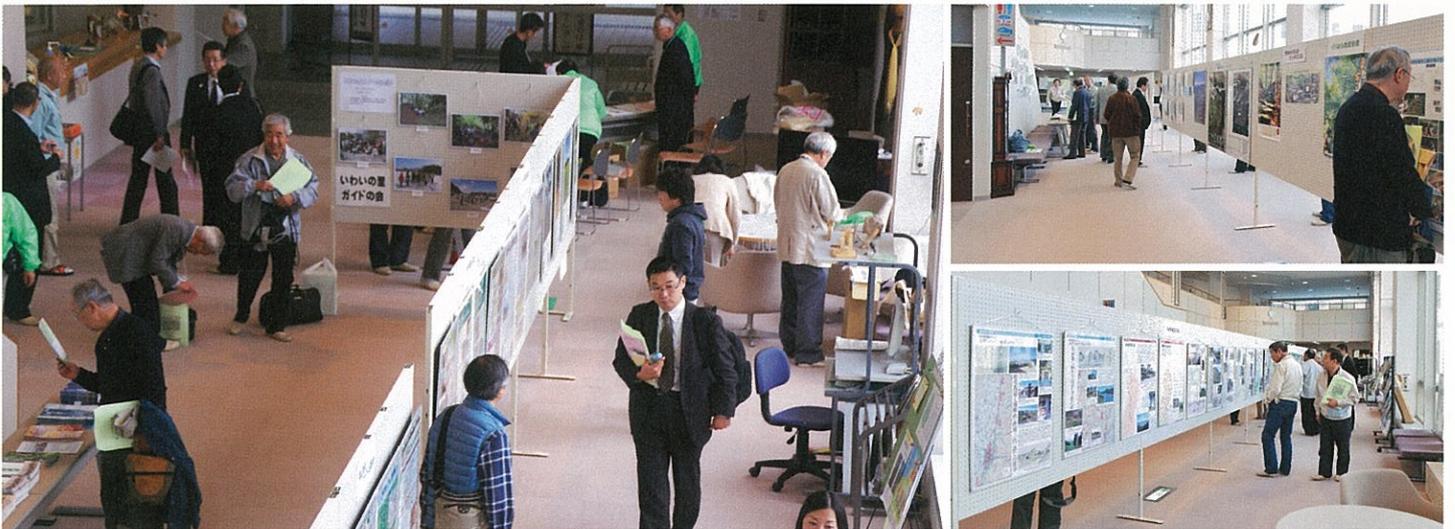
それと、遠くから来られる方は、その土地の言葉でガイドしてほしいと思っている方が結構います。私の回りの会員は地元の方が多いため、そういう点では喜ばれているのが現状です。

(一部は紙上対談としています。)

本寺神楽



街道パネル展



交流会（街道談義）



探訪会 [A：骨寺村をめぐる]



若神子亭展示棟見学



旧馬坂新道からの風景



慈恵塚



慈恵大師拝殿



水田の風景



若神子社と駒形根



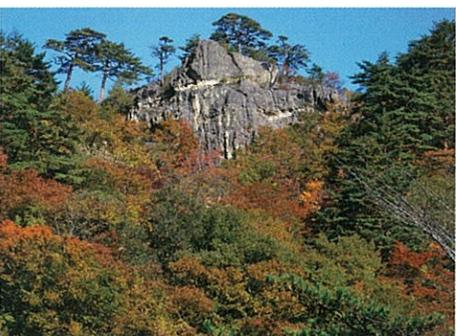
若神子社



昼食風景



昼食献立



山王窟



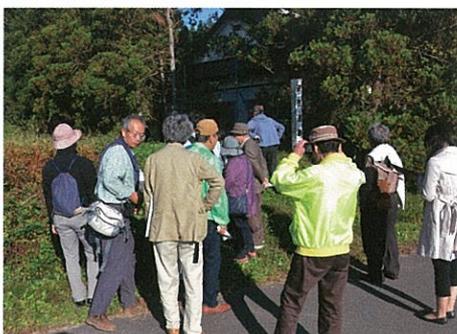
梅木田遺跡



駒形根神社



民家と水田



遠西遺跡



一関市博物館

探訪会 [B：芭蕉の道を辿る]



弁財天堂



大長寿院



旧覆堂



金色堂前



東物見台



高館



女ころし坂



女ころし坂頂上



女ころし坂



昼食を挟んだ懇談



昼食献立



苅又一里塚



苅又一里塚



県境沿い



よしめき坂

主催：「とうほく街道会議」第9回交流会 一関大会実行委員会

いわいの里ガイドの会、とうほく街道会議、いわて感動ネットワーク、本寺地区地域づくり推進協議会、観光交流ネット千蔵、NPO 法人一関文化会館、一関商工会議所、(一社)一関観光協会、【オブザーバー】一関市、一関市教育委員会、平泉町、岩手県、東北地方整備局

後援：あおもりかいどう交流会、あきた山の學校、みやぎ街道交流会、くりはら街道会議、関山街道フォーラム協議会、出羽の古道・六十里越街道会議、越後米沢街道・十三峠交流会、ふくしまけん街道交流会、羽州街道交流会、NPO 法人東北みち会議、NPO 法人全国街道交流会議、岩手日報社、岩手日日新聞社、河北新聞社、朝日新聞盛岡総局、毎日新聞盛岡支局、読売新聞盛岡支局、NHK 盛岡放送局、テレビ岩手、IBC 岩手放送、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、ICN 一関ケーブルネットワーク、エフエム岩手、一関コミュニティ FM